

研究プロジェクト

研究プロジェクト一覧 (平成25年度)

教員提案型連携プロジェクト

大区分	研究課題	プロジェクト代表者
負の感情	快感情の神経基盤	船橋新太郎
	甲状腺疾患におけるこころの働きとケア	河合俊雄
	ストレス予防研究とストレス緩和プログラム開発	カール・ベッカー
	倫理的観点に基づく認知症介護の負担改善～認知症における介護QOLスケール試作化研究～	清家 理
こころ観	こころ観の思想的・比較文化論的基礎研究(人類はこころをどのようにとらえてきたか?)	鎌田東二
	こころとモノをつなぐワザの研究	鎌田東二
	こころの古層と現代の意識	河合俊雄
	不正直な行動の神経生物学的基盤の研究	阿部修士
	精神と科学との対話を通じたこころ観の再構築	熊谷誠慈
	ヒマラヤ宗教精神の研究	熊谷誠慈
きずな形成	信頼・愛着の形成とその成熟過程の比較認知研究	森崎礼子
	他者理解に関わる感情・認知機能	吉川左紀子
	農業・漁業コミュニティにおける社会関係資本	内田由紀子
	コミュニケーションの言語・文化的基盤	内田由紀子
	治療者・社会・病に関する意識調査	カール・ベッカー
	終末期に対する早期支援	清家 理
自然とからだ	癒し空間の比較研究	鎌田東二
発達障害	発達障害へのプレイセラピーによるアプローチ	河合俊雄
	発達障害の学習支援・コミュニケーション支援	吉川左紀子
	大人の発達障害への心理療法的アプローチ	畑中千紘
教育	こころ学創生:教育プロジェクト	吉川左紀子
震災	東日本大震災関連プロジェクト～こころの再生に向けて～	鎌田東二
幸福感総合	地域の幸福プロジェクト	内田由紀子
	国民総幸福(GNH)を支える倫理観・宗教観研究	熊谷誠慈

一般公募型連携プロジェクト

研究課題	プロジェクト代表者
被災地のこころときずなの再生に芸術実践が果たしうる役割を検証する基盤研究II	大西宏志(京都造形芸術大学教授)
身体と象徴:自然・社会・人体のリズムの総合的研究	木村はるみ(山梨大学大学院教育学研究科准教授)
心理療法場面にみられる象徴化機能の現代的問題に関する臨床心理学的研究	前川美行(東洋英和女学院大学准教授)
子どもの発達障害と作業療法	長岡千賀(追手門学院大学経営学部准教授)
高齢者の認知能力に及ぼす運動の影響	積山 薫(熊本大学文学部教授)

研究プロジェクト

快感情の神経基盤

船橋新太郎(こころの未来研究センター教授)

■目的

美術館には絵画、彫刻、工芸品が多く展示されているが、そのすべてが気に入るわけではなく、そのなかのいくつかの前で立ち止まってしばらく見続けることがある。気に入った風景の場所に行けば、何時間でもそこに佇んでいられるし、気に入った音楽ならば何度聞いても飽きない。好きな絵画、好きな風景、好きな音楽は、私たちの情動系に働きかけ、心地よさ、快感、喜びなどのpositiveな感情を生み出す。しかしながら、同じ絵画や彫刻や工芸品であっても、光の当て方や写真の撮り方の違いで表面の状態が微妙に変化し、その結果、それを見たときに生じる感情も異なることがある。

本研究では、質感と呼ばれる物体の表面の状態の変化がその物体に対する好ましさを与える影響と、質感の変化に伴う好ましさの変化を生じるメカニズムの解明を目的として実施した。

■実験の概要

同じ視覚刺激の光学的特徴(色、明るさ、表面の粗さなど)を操作することによりその質感を変化させ、同じ刺激の質感の変化がその刺激の選好性を与える効果を行動学的に検討した。

一方、ヒトの脳機能イメージング研究などにより、前頭葉眼窩部や前部帯状回が、心地よさ、快感、喜びなどのpositiveな感情にかかわっていることが明らかになっている。そこで、前頭葉眼窩部の活動変化が、特定の刺激の質感の変化による選好性の変化に影響を与えるのではないかと考え、刺激の質感の変化に対する前頭葉眼窩部の活動の変化を検討した。同時に、刺激に対する選好性の強さが、その刺激によって惹起されるpositiveな感情と相関するかどうかを検討する目的で、前頭葉眼窩部ニューロンの応答の強弱と行

動で現れた刺激に対する選好性の強弱の相関の有無を検討した。

■実験の方法と結果

選択行動実験で使用した50種の視覚刺激のなかから、選択率の高い刺激を10種、選択率の低い刺激を10種選択し、それぞれの刺激群から5種ずつを選択して構成した10種類からなる2つの刺激グループを作成し、選択行動課題遂行時のニューロン活動を検討した。同時に、注視点の注視時に、50種のオリジナルの視覚刺激や、その色味や粗さを変えた刺激を、1種ずつ順次呈示し、刺激に対する前頭葉眼窩部ニューロンの応答を検討した。

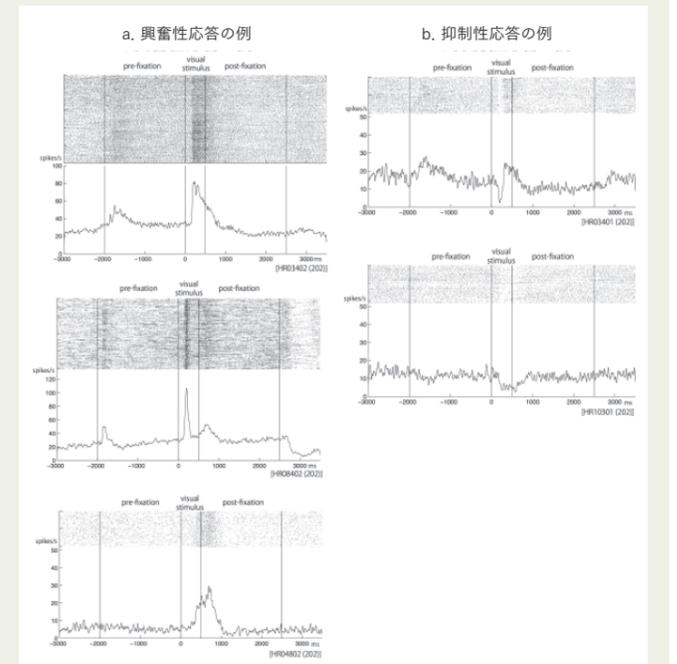
2頭のサルより現在までに182個の単一ニューロン活動を前頭葉眼窩部から記録し、解析した。多くのニューロンで視覚刺激に対する応答が観察された。応答潜時は250-300msで、一過性の興奮性応答を示すものと、一過性の抑制性応答を示すものが存在していた。また、刺激選

択性も多くのニューロンで観察された。さらに、オリジナルの刺激、色味や粗さを変えた刺激に対する応答を比較したところ、多くのニューロンでは応答に差がなかったが、少数のニューロンでは粗い刺激に対する応答の減弱が見出された。

選択行動課題実行時の活動では、刺激選択期ならびに選択刺激の注視期に興奮性活動が観察された。同一刺激が選択すべき刺激として呈示されても、選択される場合と選択されない場合で刺激選択期の応答の大きさが異なるニューロンが存在した。また、選択される刺激の違いにより、刺激選択後の選択した刺激の注視期の活動にも違いが見出された。

■まとめと今後の展望

視覚刺激呈示に対する応答の違いや、選択行動課題時の活動の違いが、刺激の選択率の違いにかかわっていると考えられる。今後は視覚刺激に対するニューロン活動の違いと、行動で観察された刺激選好性の違いの間にどのような関係があるかをさらに検討し、選好性判断にかかわる前頭葉眼窩部の役割を検討する。



前頭葉眼窩部で観察される視覚応答

研究プロジェクト

甲状腺疾患におけるこころの働きとケア

河合俊雄（こころの未来研究センター教授）

■はじめに

甲状腺疾患は、糖尿病と並ぶ代表的な内分泌・代謝系疾患であるが、時にイライラや情緒不安定などの精神症状を伴うことが知られている。こうした場合はとくに心身両面のサポートが大切であり、患者のなかにはこれらの症状をきっかけに心理療法（カウンセリング）を訪れる者もある。当プロジェクトは、甲状腺疾患専門の隈病院での心理療法の実践を基盤に、甲状腺疾患を抱えて来談される方にどのような心理療法的アプローチが有効であるのかを検討する目的で開始された。

これまで、①NEO-FFI、②バウムテスト、③半構造化面接という3つの心理査定法を用いて、甲状腺疾患を抱える方の心理的特徴を明らかにし、それによって身体治療に寄与するような心理療法のあり方を探ってきた。そのなかで、甲状腺疾患の心理療法は「負の感情」を強く語る神経症患者とは異なる構造をもち、神経症を対象とした従来の心理療法をそのまま適用するだけでは展開しづらい可能性が指摘されている。しかし、その心理的機序についてはいまだ不明の部分が多い。平成25年度は半構造化面接の分析を進め、甲状腺疾患の方は臨床場面で実際にどのように語るのかを検討した。

■方法

・対象

甲状腺疾患群：144名（バセドウ病62名、慢性甲状腺炎33名、結節性甲状腺腫49名）

神経症群：44名

・手続き

甲状腺専門病院（甲状腺疾患群）および心療内科クリニック（神経症群）を訪れた初診患者に、心理療法のインタビュー面接に準ずる半構造化面接を行った（表1）。

・分析

質問項目に対する回答のバリエーションとして全78指標を作成した。「該当する」を1、「該当しない」を0とし、78指標に基づいてクラスター分析を行い、語りを類型化した。

■結果・考察

・結果の全体像

クラスター分析の結果、A～Dの4つのクラスターを得た。各クラスターの特徴を把握するため、フィッシャーの直接確率検定を用いて、4クラスター間で疾患群の構成比率（図1）と、分析指標の出現比率を検定した。

・クラスターの特徴

A～Dの4つのクラスターの特徴は、以下のようにまとめられた（表2）。

類型的特徴は、感情の語られなさや流動的視点に特徴づけられるクラスターA・Bと、葛藤と定点に特徴づけられるクラスターDとで大きな対称をなしていた。クラスターCは、定点をもつものの、それが自己反省的にならないという点で両者の中間に位置づけら

来談経緯・主訴	どのようなことで受診されましたか？ そのことに気づいたのはいつごろですか？どんな時期でしたか？ 思い当たるきっかけなどはありますか？
性格	自分の性格についてどう思いますか？ 小さいころは、どのような子どもさんでしたか？
家族・対人関係	家族には伝えましたか？伝えた場合、家族の反応はどうでしたか？ 周囲の方との人間関係はどうですか？ ご病気になられたことで、家族や周囲の人との関係に変化はありましたか？
心理療法への関心	カウンセリングに関心はありますか？

表1 半構造化面接における質問項目

クラスター	疾患群	人数	特徴
クラスターA 語りか内面から離れていく	神経症群	2名	・症状の気づき少、感情表現少、葛藤少、心理的内容少 ・自己像肯定的、他者関係肯定的 →情緒的反応に薄い、内面をとらえにくい
	バセドウ病群	24名	
	慢性甲状腺炎群	11名	
	結節性甲状腺腫群	15名	
クラスターB 内面が外側に委ねられている	神経症群	1名	・症状の気づき少、葛藤少 ・他者からみた自己像、仲間意識強、他者の影響強 ・主語の流動多、トピックの流動多 →意思・行動が他者に委ねられている、自他の区別不明瞭
	バセドウ病群	4名	
	慢性甲状腺炎群	4名	
	結節性甲状腺腫群	11名	
クラスターC 内面にふみこまない	神経症群	7名	・葛藤少、カウンセリングへの関心少 ・反応的感情表現多 →心理的問題への気づきはあるが、内省はされない
	バセドウ病群	26名	
	慢性甲状腺炎群	15名	
	結節性甲状腺腫群	21名	
クラスターD 内省・葛藤する	神経症群	34名	・症状の気づき多、感情表現多、葛藤多、心理的内容多 ・自己像否定的、他者関係否定的 →内面をとらえる視点が明瞭で、心理的に吟味される
	バセドウ病群	8名	
	慢性甲状腺炎群	3名	
	結節性甲状腺腫群	2名	

表2 クラスターの特徴

れた。日常の語りに近いと考えられるクラスターCはいずれの疾患群も含む一方、クラスターA・Bは甲状腺疾患群に特徴的で、クラスターDは神経症群に特徴的だった。

出来事を内省的に語る事がむずかしいという点でクラスターA・Bは、心身症患者の特徴として従来指摘されてきたアレキシサイミア特性とも重なると考えられた。葛藤や定点のもちにくいクラスターA・Bは、「流動的な〈私〉」という主体のあり方を特徴とし、それゆえに“私が私を見る”という心理療法における物語のパラダイムに適合しにくいことが示された。しかし、それはあくまでも近代主体を中心とした見方であり、近代主体とは異なるあり方で語りが生産されていると考えられた。こうした語りの特徴づけられる心理療法においては、流れてゆく語りのどのポイントに〈私〉のリアリティがあるか、どのポイントで〈私〉が立ち上がるか、主体の現れる契機をつかむことが重要と思われる。

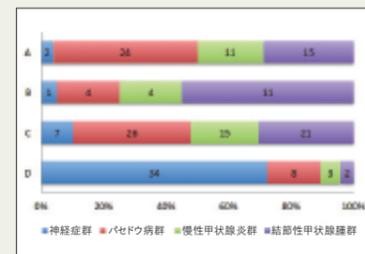


図1 クラスターごとの疾患群比率

研究プロジェクト

ストレス予防研究とストレス緩和プログラム開発

カール・ベッカー（こころの未来研究センター教授）

■研究の目的と実施方法

看護師が置かれている現状は、慢性的な人手不足、過酷な勤務状況にある。そしてその多くは、バーンアウトや離職したりしている。どのような刺激や状況によって新人看護師は燃え尽きるのでしょうか。バーンアウトや離職を有効的に回避するには、そのバーンアウトや離職の原因を究明しなければならない。

本研究では、2010年から1,500人の新人看護師に対して、アンケート調査を定期的に行ってきた。そして、看護師の属性、ストレス対処能力、職業性ストレス、バーンアウトなどの情報を集めた。それぞれの要因の因果関係や相互の影響を突き止められたら、それに対する教育や環境改善、心理支援などの対策を考えることができる。

■調査結果の解析と公表

2013年度には、収集データの統計学的解析を実施した。データ分析の結果、まず3年の間、時間が経つにつれ新人看護師の対人関係ストレスと職場環境のストレスが増大し、バーンアウトは進行していた。また、時間が経てば仕事をコントロールできる感覚や、職務に対する達成感が高まるものの、ストレス対処能力であるSOC（Sense of Coherence）は低下し、仕事の適性や働きがいは高まらなかった。とくに、就職後3カ月はSOCの低下とバーンアウトの増加が見られ、もっともストレスが高じる時期であったと言える。そのため、就職後、早期にストレス対処能力を高める必要があることが明らかとなった。分析は継続中だが、以上の結果を公表するため、11月に、キャンパスプラザ京都で、協力施設をはじめ、一般公開の報告会を開催した。

■ストレス対処ワークショップでの活動

また、京都府下の教育委員会や医療関係者の協力を得て、「わく・湧く・ワークショップ」という公開講座を定期的に行ってきた。このワークショップでは、ストレス社会の現状とその対処法をミニ講義で紹介し、呼吸法（呼吸瞑想法）・イメージ・内観療法などを参加者に体験学習してもらってきた。参加者の主観的・客観的反応に関するデータを集めながら、そのストレス軽減法を各自の職場に持って帰って利用してもらうように勧めた。

ワークショップでは、呼吸法（呼吸瞑想法）のセッションの前後に、心理的・生理的ストレス低減効果を調査した。具体的には、POMS（気分プロフィール調査）による心理的な変化と、生理的ストレスマーカーである唾液アミラーゼ・血圧・脈拍の変化を測定し、ストレス低減効果を調査し、ワークショップに出席した63名のデータを統計学的に解析した。その結果、呼吸法による心理的・生理的ストレス低減効果において有意差が確認された。

この結果は、呼吸法が、離職率やバーンアウト率の高い職場におけるストレス低減法として有用であることを示していると言える。

■リラクゼーション研修会の取り組み

一方、病院・学校・金融機関などの職場に出張し、職員向けのリラクゼーション研修会を開催してきた。さらに、京都府教育委員会との連携事業「子どものための知的好奇心をくすぐる体験事業（出前授業）——こころとからだの声を聴いてみよう」では、小・中学生・高校生・支援学校生を対象に、ストレスの予防・低減について体験学習授業を行い、児童生徒の心身の健康保持・増進に取り組んできた。被験者数は、2013年実施分のデータ



リラクゼーション研修会では、ストレス対処能力を高め、リラクスの姿勢を身につけるための呼吸法や思考法を学ぶ



「新人看護師の耐える力——かわりゆく3年間を追って」(2013年11月9日の報告会)での発表の一場面

(4回、33名)を加えた3年間96名（通算回数12回）である。現在96名のデータ（ストレス軽減法の心理的効果と生理的効果の相関関係や、参加者の感想分析など）の解析作業を進めている。今後は、この3年間の調査結果を学会で発表し、書籍にまとめて出版する予定である。

■まとめ

ワークショップや出前授業などの推進活動、3年間の取り組みの成果は、学校や病院などのリラクゼーション研修会へ講師として招かれるようになった点でも明らかである。この招聘により、簡便なストレス低減法としての呼吸法を普及させる土壌が育ちつつある。この活動を通じて、多重業務で多忙な職場に働く人々やストレスに悩む児童生徒の精神的な支援を実施していきたい、さらには、離職率・バーンアウト率の改善に寄与できればと考えている。

研究プロジェクト

倫理的観点に基づく認知症介護の負担改善

清家 理 (こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定助教)

■研究の目的

日本の認知症患者は急増している。同時に、家族介護者の疲弊や共倒れ、認知症患者に対する虐待、介護放棄など、倫理に反する悪循環が多発し、社会問題となっている。その背景には家族介護者（以下、介護者）の苦悩や疲弊の増加があり、これらへの予防策を講じることが急務である。そのためには、介護者の苦悩や疲弊の内容、その程度を的確に測定・把握する必要がある。つまり、認知症介護の心身状況を視覚化し、そのニーズと支援介入内容が明確になる指標の必要性が顕著となっている。

そこで本研究では、「介護負担軽減に必要な要素」が「介護QOL向上の要素」と操作的定義を実施した上で、認知症に特化した「介護者の介護QOL指標」の開発を研究目的とした。これらの作業を通じ、新しい指標が開発されたあかつきには、倫理に反する虐待や介護放棄などを予防する、認知症介護の新しいあり方が提案できるものと期待している。

■平成25年度の研究内容

本プロジェクト1年目(2013年度)は、認知症に特化した介護者の介護QOL指標の構成要素となる、認知症における介護負担軽減に必要な要素の抽出を実施した。

研究対象は、国立長寿医療研究センターもの忘れ外来に通院し、在宅生活を送る認知症患者の家族介護者(以下、介護者)であった。半構造化面接を介護者1人当たり2回実施する方法を採用した。1回目の面談終了後、半年から1年未満経過した時点の外来受診時に、2回目の面談を実施した。研究への同意を得られた介護者に対し、属性(性別、N-ADLもしくはBI、NM-SもしくはMMSE、DBD-Scale、ZBI;Zarit-

Burden-Interview)、介護年数、介護者の直接的介護状況や内容、ソーシャルサポート状況、介護感情とその変化、認知症の受容、介護当事者の会への参加有無、今後の介護の見通しや意向と備え(ACP、事前指示等)を聞き取り項目とした。

属性等の数値的データは統計解析を実施し、介護者の語りから得られた質的データは、切片化し、変数化作業を施した上で統計解析を実施した。平成26年3月10日現在、1回目のみ面談終了者は97名、2回目の面談終了者は30名であった。転帰解析できた30名について、以下、主な結果を示す。

■研究結果と考察

まず要介護者の転帰では、ADL、認知機能の低下、周辺症状の増加など、介護負担が増加する要素の数値が上昇していた。次に、認知症患者の転帰は、N-ADL(36.4→34.8)、NM(30.1→27.2)、DBD(22.5→25.1)で悪化傾向にあった。つまり、ADL、認知機能の低下、周辺症状の増加等、介護負担が増加する要素の数値が上昇していた。また、フォーマルサポート利用有無の転帰は、利用中の者が40%(12名)→60%(18名)に変化し、サポート利用量の増加者は33%(10名)であった。

既存の介護負担尺度であるZBIが34.3→38.5に増加していたことから、介護負担が増えたとも言える。しかし、介護感情の転帰で、1回目時は、重いイメージを想起させる言葉(義務・修行・忍耐)が各30~50%を占めたのに対し、2回目時は前向きなイメージを想起させる言葉(恩返し・勉強・お互い様)が各20%~25%を占めた。結果、重苦しいイメージの言葉よりも前向きなイメージを想起させる言葉の表出が多く現れていた。

また、ZBIの転帰増減群別に、介護

意識変容の肯定的感情(そのとおりだ、できるようになった)、否定的感情(そのとおりではない、できない)の該当率を分析した。(Mann-Whitney u-test)分析前の作業として、介護意識変容を5領域(1:介護スキル、2:認知症の受容、3:セルフメンテナンス、4:介護者同士のつながり(セルフヘルプ)、5:他者の支援協力など、介護環境づくり)に分類した。

分析の結果、ZBI増加群で、「周辺症状への対応ができるようになった」、「認知症を受け止めることができるようになった」という、肯定的感情が有意に高かった。逆に、ZBI低下群では、「認知症を受け止めることができない」、「自分のしんどい気持ちをどうすることもできない」、「他の人とかわりたくない、実情を知られたくない」という、否定的感情が有意に高かった。

以上により、転帰では認知症患者の認知症の症状進行に伴い、運動機能・認知機能共の悪化が見られ、介護負担は数値上、増加傾向にあった。しかし、詳細分析したところ、ZBI増加群は、介護者自身の介護対処行動に対する肯定的感情、ZBI低下群は閉鎖的な介護環境を想起させる否定的感情の表出が顕著であった。このことから、ZBIスコア上の増減だけでは、認知症の介護状況を把握しきれないことが示唆された。介護者のコーピング(介護スキル、受容、ストレスマネジメント)、介護者の心身健康状況、介護者のソーシャルポジションとネットワーク状況を基軸とした包括的な測定視点が必要だと言える。

研究プロジェクト

こころの古層と現代の意識

河合俊雄 (こころの未来研究センター教授)

■研究目的

本プロジェクトは、現代人のもつ隠れた素地としての「こころの古層」と、時代に応じて移り変わる「現代の意識」という2つの視点から日本人のこころの特性について検討を行うものである。

「こころの古層」とは、ふだんは表面に現れていないものであるが、たとえば非常に現代的な生き方をしている人であっても、時に古代的なイメージとの深いつながりが見えることがあるように、こころの奥にはわれわれが普遍的に共通してもつ層があると感じられることがある。とくに心理療法を行っている、そうした局面やイメージに遭遇することは多いし、そのような深い層とのかかわりがその人のこころの変化にとって重要な意味をもつことも少なくない。このような現象を考えれば、こころのもつ可塑性は、こころそれ自身のもつ多様な層とかかわるものではないかと考えられる。

そこで、文学作品や思想、倫理など、蓄積された歴史や思想を分析することでそこに反映されたこころの層を古い部分から最新のレベルにわたって分析し、その本質を探ることを目的としている。こころをこのように多層的なものとして捉える視点は、現代をいかに生きるかを考える上で、われわれにヒントを与えてくれるであろうと考えている。

■平成25年度の研究内容

1. こころの古層を探る

平成25年度にはこころの古層について探るため、これまで本プロジェクトで行ってきた『遠野物語』の研究をまとめた本が発刊された(河合俊雄・赤坂憲雄編『遠野物語——遭遇と鎮魂』岩波書店、2014年)。柳田國男『遠野物語』は震災以降、東北の古層をひもとく古典として再び注目されているが、本書では民俗学、臨床心理学、国文学、



河合俊雄・赤坂憲雄編『遠野物語——遭遇と鎮魂』岩波書店、2014年

歌人など多彩な書き手が新たな読みを提示し、対話を繰り広げた。なかでも明治43年(1910)の天津波の際の話である99話は本書の軸となっている。河合はこのなかで、心理学からの新たな読みとして異質な他者との遭遇の多さを指摘し、境界において発生する意識のあり方について論じた。

また、早稲田大学より唐澤太輔先生を招聘し、南方熊楠についての研究会を行った。ここでは、夢や熊楠の「理不思議」という概念に着目し、通常意識世界を超えた深い層と熊楠が実際にどのようにかかわって生きていたのか、それがどのように思想に反映されているのかについて検討された。こうした発想はこころの深い層を重視するユング心理学とも共通している。とくに夢に従って現実の場所で粘菌を発見するなど、熊楠は深い層と現実的な層との接点に何かが発生する動きをみていたと思われ、心理療法で見られる新たなイメージの発生やインターフェイスという視点からも興味深いものと考えられた。

2. 現代の意識

現代のこころや意識の特徴について、こころの古層をその基礎に踏まえつつ検討した。

平成25年度は、発達障害が増加する社会と現代の意識についての検討を行った。たとえば、近年、心理療法の場

で出会う事例では、不安の持ち方が変化してきているという実感をもつことが多い。他人からどう見られているかが気になるといったような対人恐怖的な不安は1960年代からみられたものであるが、それはかつて、背後など自分から見えない領域から送られる視線に対する不安が中心であった。しかし、昨今の大学生の相談では、「誰からも見られないように教室の一番前に座るようにする」などの発言が聞かれることがある。ここには背後に迫る一般的な他者は想定されておらず、自らの視野の範囲に他者が入らなければ不安は生じないようである。こうした悩みの語られ方の変化は、以前とは異なる意識を大学生がもっていることを反映していると捉えられるだろう。また、心理療法で扱われる夢や箱庭といったイメージ表現にも隙隙のないものなど、自然な意味の解釈がむずかしいようなものが増えており、「物語」や「イメージ」についても象徴的な意味が薄れ、その意義が変化しつつあると考えられた。

ほかにも、河合が「村上春樹と中世の物語」という題でスイスにてチューリッヒ・レクチャーを行った。

また、継続的に行ってきた震災後のこころのケアの活動としての宮城県石巻市への訪問は平成25年度も続けられ、それらの活動の成果は『箱庭療法学研究』震災特別号を通じて発信された。

■今後の課題

平成26年度にも継続して、文学作品や思想、臨床事例を素材として現代の意識とそのベースにあるこころの古層について多面的に検討を続けていく。とくに上記のチューリッヒ・レクチャーの内容については、河合が英語の書籍として刊行予定であるほか、講演や書籍などの形で研究成果を社会に発信したいと考えている。

研究プロジェクト

不正直な行動の神経生物学的基盤の研究

阿部修士（こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定准教授）

■本プロジェクトの概要

本プロジェクトの主要な目的は、ヒトの不正直な行動、すなわち、うそにかかわる神経基盤を明らかにすることである。前年度までに作成した正直さ・不正直さを評価するための実験パラダイムを用いて、今年度からは機能的磁気共鳴画像法（fMRI）を用いた実験でのデータ収集に着手している。

ヒトの不正直さに関する先行研究の大きな問題点として、うそをつく行為が実験室的なものであり、現実の社会的状況下におけるうそとは異なるものである点があげられる。本プロジェクトでは、被験者自身が自発的にうそをつくことで金銭的な報酬を獲得することが可能な課題を用いることで、うそをつく認知過程の中核的なプロセスへのアプローチを試みている。

現在までに得られたデータの予備的な解析からは、正直な振る舞いをする被験者から、不正直な振る舞いをする被験者まで、大きな個人差があることが明らかとなっている。現時点では十分な数のデータが揃っていないため、本プロジェクトでは来年度もデータ収集を継続する。行動データの分析に加え、質問紙による調査結果と脳構造・脳機能データの解析を多角的に進めていく予定である。

■関連する研究成果

今年度は上述の研究実施に加え、うそと関連の深い、あるいは異同が問題とされる、虚記憶と呼ばれる記憶のエラーの神経基盤についての論文を発表したので、その成果をここで報告する（Abe et al., 2013）。

ヒトは実際には経験していない出来事に関する誤った記憶（虚記憶）を思い出す場合があり、健常者でも一定の割合でこうした記憶のエラーが起こることが知られている。この虚記憶は記

憶を形成する過程、すなわち記憶のエラーによるものなのか、記憶を思い出す過程、すなわち想起のエラーによるものなのか、あるいは両方の要因によるものなのかは、まだ十分なエビデンスが得られていない。そこで本研究では、虚記憶の記録と想起にかかわる神経基盤を特定することでこの問題にアプローチすべく、fMRIによる再認記憶課題の実験を行った。

本研究には右利きの男性被験者33名が参加し、fMRIによる撮像は記録課題、想起課題の両方で実施された。記録課題では360枚の写真が1枚ずつ呈示され、被験者はそれぞれの写真が生物か、非生物かを判断する課題を行った。その後の想起課題では、1) 学習した写真と同一の写真120枚（Same刺激）、2) 学習した写真と似てはいるが異なった写真240枚（Similar刺激）、3) 学習した写真とは似ていない異なった写真120枚（Dissimilar刺激）、が1枚ずつ呈示された。被験者はそれぞれの写真に対して、a) 記憶の詳細を思い出せる（Remember反応）、b) 詳細は思い出せないが既知感がある（Know反応）、c) 初めて見る（New反応）の3択で回答した。

行動データの分析結果からは、Dissimilar刺激に比べSimilar刺激に対してより多くの虚記憶（RememberもしくはKnow反応）が認められ、実験的に虚記憶を高い頻度で誘発することに成功した。記録時のfMRIデータでは、右の頭頂葉皮質が正確な記憶の形成の際に（後の想起課題において正しく再認されたSame刺激の記録時の活動）、虚記憶の形成に比べ（後の想起課題において虚記憶が発生したSimilar刺激の記録時の活動）、有意に高い活動を示すことが明らかとなった。さらに右の視覚皮質では、正確な記憶を形成する際に、後のRemember反応につな

る詳細な記憶の形成にかかわる特異的な活動の増加が認められたが、虚記憶の形成においてはこの効果は認められなかった。想起時のfMRIデータでは、右の海馬傍回が正確な記憶を想起する際に、詳細な想起であるRemember反応にかかわる特異的な活動の増加が認められたが、虚記憶の想起においてはこの効果は認められなかった。

これらの結果は、虚記憶には記録と想起の際の特異的な神経活動パターンが複合的に関与することを示唆している。また、主観的なRemember反応とKnow反応による違いが、神経レベルでも表象されていることを示す知見と言える。

■今後の展望

正直さ・不正直さにかかわる脳の研究については、現実世界におけるうそをfMRIなどの特殊な環境下で実施するという方法論的なむづかしさもあり、まだ未解明のメカニズムが数多く残されている。

また、今回報告したような記憶プロセスとの関連についても、まだ多くの検討の余地が残されている。たとえば虚偽検出の研究では、うそを見抜くことができるかどうかには焦点を当てられることが多い。しかし、本人の記憶が間違っている場合には、うそを見抜くことができても真実には到達できない。したがって、記憶のエラーとうそのメカニズムを統一した枠組みで研究する必要がある。

今後も引き続き、こころの未来研究センターに設置されているMRI装置を活用することで、うその意思決定にかかわる神経基盤を明らかにしたいと考えている。

研究プロジェクト

精神と科学との対話を通じたこころ観の再構築

熊谷誠慈（こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定准教授）

■研究の背景・目的

第2次世界大戦終結後、わが国は敗戦による壊滅のなかから奇跡的な復興を遂げ、一躍、世界に冠たる経済・技術大国となった。そのなかで、経済はおろか、健康、教育、文化など、あらゆる側面において、わが国は長足の進歩を遂げたかに見える。しかしながら、それらはおおよそ物質的な側面に限定されており、精神的な面では、進歩どころか大きな後退・混乱が認められるのではない。

一見すると、ものが溢れ、経済的に満ち足りているように見える一方で、自殺率が毎年世界トップクラスを記録し、学校でのいじめが跡を絶たず、若者の引きこもりが問題化し、さらに、少なからぬ高齢者が人とのつながりを失って孤独死していることは、表面的な物質的繁栄の陰で、国民の精神面がないがしろにされてきた何よりの証左であろう。

近年では、2011年3月11日の東日本大震災と、それに続く福島原発事故は、経済・技術大国としてのわが国の限界をありありと見せつける大惨事であった。しかしながら、震災の混乱に際して日本人が我を忘れて互いに助け合う姿は、世界中の人々の喝采を浴びただけでなく、たとえば現代人が「個人」に比べて軽視しがちだった「人と人とのつながり」や「絆」などの、伝統的な価値や精神性に対する認識を改めるきっかけともなった。

こうした背景から、本プロジェクトでは、閉塞した現代社会にとって真に望まれるところの、新たな価値基準の創出に向けて、国内外の科学者や思想家、宗教家たちが対話と議論を重ねることで、東洋と西洋、科学と宗教など、多種多様な視点から、「こころ」を再考することを目指す。

とりわけ、若手の研究者や思想家、

宗教家に広く参加を募ることによって、若い世代の人材開発・育成に貢献することが予想される。また、研究成果については、シンポジウムや出版物を通じて広く社会に発信することで、学术界のみならず一般社会に対しても、豊富な精神的利益を還元することが期待される。

■研究の方法

セミナーやワークショップ、シンポジウムを開催する中で、異分野の研究者間で議論・情報交換・共同研究を行う。

■研究会・ワークショップ

宗教は一般に「非科学的」、あるいは「非現実的」と言われ、前時代の迷信として片づけられることが少なくない。では、高度な科学知識に支えられ、科学技術の産物に限なく取り囲まれた現代社会に生きるわたしたちが、それでもなお、神社や寺院にそろって参詣したり、あるいは結婚式で神や仏を前に婚姻の誓いを交わしたりするのはなぜだろうか。こうした一見奇妙な現象の背後に存在している感情は、日常の理性的な判断や決定とは根本的に性質を異にし、論理的に筋道立てて説明することがむずかしいもののように思われる。だからこそ、宗教的な事象に対して一方でうさん臭さを感じながらもなお拒絶してしまうことができず、一定のジレンマを抱える人が少なからずいるのであろう。

しかしながら、宗教ははたして本当に「非科学的」なのであろうか。そもそも宗教は近代科学とはまったく異質で、互いに橋を架けあって対話し、交流することなどできない存在なのであろうか。それではなぜ、すでに述べたように、われわれの社会には、科学と宗教が部分的にはあれ、同居しているのだろうか。われわれはこのよう

疑問をきっかけとして、今回、「精神と科学との対話研究会」を始めることになった。本研究会は、活動分野を異にする研究者および実務家、実践者が集い、宗教と科学の間の共通点と相違点を吟味し、それぞれの役割および価値、両者の対話の可能性について認識を新たにすることを目的としている。

2013年9月19日（木）には、第1回「精神と科学との対話研究会」（テーマ：研究者と宗教者が語る宇宙・生命・宗教）を、京都大学こころの未来研究センター（225会議室）において開催した。同会は、宇宙物理学者の磯部洋明氏（京都大学学際融合教育研究推進センター准教授）の主催する「お寺で宇宙学」との共同企画として行われ、磯部氏、分子生物学者の齊藤博英氏（京都大学白眉センター／iPS細胞研究所准教授）、宗教学者の熊谷誠慈（京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定准教授）の3名が、互いの研究分野の紹介を交えながら、「宇宙・生命・宗教」について議論を行った。3名の発表後には、妙心寺塔頭退蔵院の松山大耕副住職が、宗教家としてとくに禅仏教の立場から各発表へのコメントを行った。その後、「宇宙空間における宗教はどのようなものになるのか?」、「生命科学宗教」、「そもそも宗教を科学的に検証する必要はあるのか?」など、さまざまなテーマについて、参加者全員で討議を行った。

研究プロジェクト

農業・漁業コミュニティにおける社会関係資本

内田由紀子（こころの未来研究センター准教授）

■研究目的

本研究では、人と人とのつながりが形成される過程と、その構築・維持におけるプロの役割を検討するための一連の調査を実施した。

1. 農業コミュニティ・漁業コミュニティにおける社会関係資本の重要性と、その構築・維持におけるプロの役割の評価と説明

これまでの研究においてわれわれは、農業コミュニティにおける普及指導員の役割に注目し、円滑にネットワーク形成を行う指導員のスキルや、そうしたネットワークが農業コミュニティの問題解決能力・生活レベルの向上に及ぼす影響を検討してきた。具体的には、平成22年度に実施された農業普及指導員への全国調査を通して、社会関係資本の形成プロセスが検討されてきた。この研究成果を受け、本研究では、水産業普及指導員と彼らが担当する漁業コミュニティに研究対象を拡張、生業によるコミュニティの性質の違いを比較検討することとした。

2. 生業に応じて異なる社会関係資本のタイプについて

社会関係資本にもさまざまなタイプ（たとえば、結束型と橋渡し型）がある。本研究では、生業の特性（たとえば、農業と漁業）で社会関係資本のタイプがどのように異なるかを検討することを目指した。

■調査の実施とこれまでの知見

調査① 全国の水産業普及指導員を対象とした調査

平成22年度に実施された農業普及指導員の全国調査に対応した調査を、全国の水産業普及指導員を対象に実施した。その結果、276名（回収率60％）からの回答を得ることができた。ここでは、コミュニティにおける社会関係資本の構築・維持のプロである普及指

導員のスキル、社会関係資本がコミュニティの問題解決能力・生活レベルの向上に及ぼす影響、普及指導員の活動を支える人々の役割などを検討した。

分析の結果、いくつかの点で農業普及指導員を対象とした調査結果が再現された。第1に、対象集団（担当地域）のメンバー（地域住民など）間の信頼関係と、普及指導員の連携活動能力、普及指導員の職場（普及センターなど）の人間関係の良好さ、普及指導員と対象集団の結びつきの強さのそれぞれが、正の相関を示した。第2に、むずかしい課題に直面した対象集団に対する支援（普及活動）のうち、「将来に向けたビジョンの提示」「地域の具体的問題の指摘」が、とくに効果を発揮しやすかった。これら2点は、農業コミュニティと漁業コミュニティに共通した現象である。

一方で、農業の場合と異なる知見も得られた。第1に、農業では、対象集団のメンバー同士の信頼関係が、対象集団の生活レベル（暮らし向き）と正の相関を示していたが、漁業コミュニティではこれが見られなかった。第2に、むずかしい課題に直面した対象集団への支援として、農業では、「関係機関と連携調整」「農業者同士の連携」が効果を発揮しやすいというパターンが見られていたが、漁業の場合はこれに対応する支援にとくに大きな効果は見られなかった。

以上の結果は、社会関係資本（メンバー同士の信頼関係や連携など）がもつ意味が、農業コミュニティと漁業コミュニティで異なる可能性を示唆している。

調査② 農業者グループならびに漁業者グループのリーダーおよび担当普及指導員を対象とした調査

近畿・中国・四国を中心としたエリアの農業者グループならびに漁業者グ

ループのリーダー的立場にある人々を対象とした調査を実施した。この調査には、グループの社会関係資本（ネットワーク、助け合いなどの互酬性、規範など）のタイプ、ならびに農業者・漁業者の視点から見た普及活動の役割・効果を検討するための項目などが含まれていた。最終的に、計1,137名からの回答を得ることができた。

調査②のこれまでの分析結果では、農業コミュニティはヨコの関係（メンバーの信頼関係）による社会関係資本が、漁業コミュニティではタテの関係（規範に基づく役割意識や階層構造など）による社会関係資本が形成されていることが明らかになった。

調査③ 農業コミュニティ・漁業コミュニティの現地調査ならびにインタビュー調査

各地の農業コミュニティ・漁業コミュニティを訪問し、普及指導員や関係者の案内の下で現地視察を行うとともに、コミュニティのリーダーの立場にある農業者・漁業者にインタビュー調査を行った。とくに、コミュニティのなかでの規範の維持、社会関係（とくに、相互協力関係）の性質などについての情報を収集した。平成25年度には、農業コミュニティ3件、漁業コミュニティ2件で調査を実施した。

■対外活動ならびに成果の発表

これまでの調査結果は、学術論文、関係機関への報告書、ならびに各所での講演活動で報告された。とくに、講演活動に関しては、農業・水産業の普及指導員ならびに普及事業関係者を対象とする各地の研修会に出席し、これまでの一連の調査結果を伝える活動を行ってきた。

今後も継続して調査結果を広く社会に還元していく。

研究プロジェクト

治療者・社会・病に関する意識調査

カール・ベッカー（こころの未来研究センター教授）

■研究の目的と対象

病気に罹患すると、身体のみならず、こころまで痛む。医療は身体の疾患を癒そうとするが、一方、こころをないがしろにしがちである。反面、患者のこころに影響を及ぼすのは、患者に対するコミュニケーション学習に乏しい医療者である。

本プロジェクトでは、主に進行性があると、アトピー性皮膚炎という慢性疾患を抱える患者を対象としている。いずれの疾患も治療には至りにくい、同じ疾患をもちながらも、患者のこころの状態（精神的態度）によっては、社会的活動や生への価値観（生きる意味）がまったく異なるからである。

まず、本研究の対象として、がん患者と時間をかけてコミュニケーションがとれる医療従事者として、鍼灸師を取りあげた。分析対象のコミュニケーションは、患者との会話や診察法としての身体接触、体内への鍼刺入や体表への施灸などの場面とした。

■がん患者に対応する鍼灸師へのインタビュー調査

鍼灸師の接し方やコミュニケーションによって、疼痛の緩和のみならず、信頼関係や希望の持続も経験的に生じている。これを実証するために、京都大学研究倫理委員会の承認を経て、がん患者に携わる鍼灸師13名にインタビュー調査を実施した。対象者のインタ



針灸師は患者の皮膚に接触したり施術したりすることによって、患者の身体状況に関する語りをうまく生み出している

ビュー内容から、コミュニケーションを構成するサブカテゴリーを抽出した。

対象者のインタビュー内容のなかから、言語コミュニケーションを成立させるサブカテゴリーは、〈一般的会話〉〈共感的会話〉〈現代医療的会話〉〈鍼灸の適応と限界、可能性的会話〉〈身体反応的会話〉〈指導的会話〉〈意識改革的会話〉の7点が抽出された。また非言語コミュニケーションでは、〈韻律素性・周辺言語〉〈身体動作〉〈身体接触〉〈空間の設け方〉〈時間の設け方〉の5点のカテゴリーが抽出された。なかでも、鍼灸師の特徴的なコミュニケーションとして〈身体反応的会話〉と〈身体接触〉があげられる。これは、時間をかけてかかわること、身体への接触や施術にともなう、患者の身体状況についての語りを生み出すことに顕著にあらわれている。そして、これらのかかわりによって、鍼灸師のコミュニケーションが、患者の気持ちや意識を変えていく可能性を秘めているとも言え、今後さらなる検証を進めてゆく。

■アトピー性皮膚炎患者に対するインタビュー調査

一方、本研究では、アトピー性皮膚炎患者も研究対象とした。アトピー性皮膚炎ははまだ治療法が確立していないことから、医師（治療者）の世界観とそれに対する患者の共鳴が、患者の心身の状態に深くかかわってくると考えられた。これらは現代医学的な病因説明に加え、医師—患者関係を変容させる要因ともなるため、患者自身の説明モデルに着目し、アトピー性皮膚炎患者の病に関する説明やイメージの特性について探索した。

本年度、アトピー性皮膚炎患者12名（患者団体Aのセミナーにて募った患者、およびセミナーにて研究主旨に賛同の上、参画した患者）を対象にイン

タビューを行い、病因帰属を明らかにした。まず、患者の語りのなかから、アトピーの原因に関する該当箇所の抜粋、内容の要約の手順を踏み、回答の分類（〈病因の内在化〉、〈病因の外在化〉、〈病因の内在化かつ外在化〉）を実施した。その上で、言葉の用い方や語り手の意図を分析した。

〈病因の内在化〉のなかでは、「食生活」と「不摂生」という回答が得られた。自らの過去の生活に対する戒めや反省、後悔が該当する。ただし、これらはメディア上でもっとも多く見られる原因の言説であり、その影響を受けている可能性もある。

〈病因の外在化〉では、「チェルノブイリ原発事故」、「バクテリア」、「薬の副作用」などの外的な要因で悪化したという語りが見られた。「バクテリア」と回答した患者は、アトピー・アソシエーション・ジャパンと連携しているアメリカの医師による診断・治療を受けた経験があり、その医師の説明を取り入れ、自らの病因として語っていた。

〈病因の内在化かつ外在化〉という2つの側面を含むカテゴリーでは、「血や骨格などのつくられ方」、「カルマ」、「血が悪い」、「腸内環境」という回答が得られた。これらは病因を自分自身に内在化させていると同時に、遺伝など家族の影響や、家系に関係するという考え方の影響をも示している。

今回の調査では、先行研究が示す、病因を内在化させる患者（Richards, 2003）や医師の説明を用いる患者（Peters, 1988）、遺伝によると考える患者（Linn, 1982）については、分類が確認できた。ただ、「病因の内在化」のうち、食生活が原因であるという語りは、とくに日本のメディア上の言説の影響を受けているのではないかと考えられる。この点については今後さらに検討を行う。

研究プロジェクト

終末期に対する早期支援

清家 理 (こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定助教)

■延命治療における問題点と
本研究の目的

近年、医療の高度化により、延命が可能になった分、倫理的問題が発生している。たとえば、患者や要介護者の意思が不明瞭もしくは確認不可の状況に陥り、胃ろうや点滴がいつまでも施されるなど、患者や要介護者の意思や状況にそぐわない事態の発生があげられる。とくにこのような事態が発生しやすいのは、救急科処置中、終末期、認知症中期～末期状態の患者である。患者が意識や判断能力を失う前に自らの希望を明確にしており、かつ何らかの形でそれを残しているか、誰かに伝えていなければ、望まない医療やケアを受けざるを得ない事態に陥る危険性がある。

これらの課題の解決策として、「事前指示書 (Advance Directive)」の記載に取り組み医療機関が増加している。しかし、その形式は、医療処置内容の決定に終始している。「どのように生きたいか」を表明したもの (事前ケア計画書; Advance Care Planning、以下 ACP) ではなく、かつ医療主導型の意思決定である。つまり、人生の終焉を見据えた生き方 (生活設計) に関する意思決定のための相談や教育など、計画的な支援内容と方法の明確化が必要だと言える。

そこで本研究では、まず ACP を「生きていく場所や方法に関する意思決定を計画的に支援していくプロセス」と操作的に定義した。そして、日本の文化に即した ACP における意思決定のための相談、教育などの支援内容と方法を明確化させた、終末期の備えに対する早期支援プログラムの開発を研究目的とした。

■平成25年度の研究内容と結果

本プロジェクト1年目の2013年度は、

退院支援を受けた患者および家族を対象に、①意思決定に関する調査と、②末期医療に関する意識調査を行った。以下、その結果である。

①退院支援を受けた患者および家族に対する意思決定の分析

研究対象は、2012年4月1日～2013年3月31日に、国立長寿医療研究センターにて退院調整看護師が退院支援を実施した患者486名であった。70～80代の患者は、がん (134名) や呼吸器疾患 (89名) が多く、病状経過の上では、延命処置の有無、療養場所の選定を厳密に実施しなければならない対象であったと言える。

退院後の療養先やその方法の決定について、意思表示をした患者は344名 (71.8%) であり、そのうち自宅退院を意思表示した者は295名 (85.8%) であった。しかし、最終的に退院先を決定した患者は、48名 (13.9%) にとどまった。患者に代わり、最終的に決定した者で多くを占めたのは、実子262名 (54.2%)、配偶者135名 (28.2%) であり、約85.0%を占める結果となった。退院支援看護師とのやり取りの窓口になる人 (以下、「キーパーソン」) が、患者の療養先やその方法の最終決定をしている状況であった。

次に、キーパーソンと患者の意向差異の有無を見たところ、「意向の差異なし」が230名 (79.0%) であり、多くは、キーパーソンが患者の意向をくみとって、最終的に退院後の療養先やその方法を決定している実態が明確になった。患者と家族 (キーパーソン) 間の意思疎通が図れている症例の場合は、今後の療養先などの選択で意向の差異が生じないが、そうではない症例の場合は、キーパーソン主導で今後の療養先が決定され、患者にとって「意思」とは異なる生活を強いられることになる。ソーシャルサポートの

導入、適切な知識や情報提供など、キーパーソンに対する支援を行うことで、患者の意思の尊重および実現につながると言える。

②医療と今後の備えに関する意識調査
——終末期医療が必要になった時の考え

京都で行われた認知症フォーラム (2013年7月15日) に参加した70～80代の高齢者238名を対象に、医療の備えに関する意識調査を実施した。認知症に興味関心を有していた者が集まったセミナーで調査したため、今後の備えに対する意識や実践率は高いだろうと仮説を設定した。

その結果、終末期医療が必要になったとき、60.0%以上の回答者は、「家族だけではなく、医療従事者と実施したい」と記したのに対し、それについて話し合ったことがある人はその半分の30.0%であった。また、話し合った契機は、「家族、親族、友人が末期がみや認知症に罹患し、周囲が大変な目に遭遇していた」、「頼れる子どももいないので、自分のことはいろいろ決めておかなければならない」に大別された。終末期医療が必要になったとき、希望しない治療内容については、「決めている者」が50.0%程度占めていたが、そのうち、約10.0%が、準備について話し合い経験がない者であった。

「終末期の医療内容を決定する場面に遭遇しなければ、万一のときのための備えができない」という状況なら、医療現場で多発している医療従事者のコンフリクトが解決できないばかりか、患者にとって望まない医療を強いてしまい、QOLを損ねてしまう危険性がある。

上記の結果から、対象は限定されていたが、最期についての早期決定を自己内にとどめず、外部に表明しておく取り組みの重要性が示唆された。本調査により、日本の文化に即した ACP の開発が急務であると言える。

研究プロジェクト

大人の発達障害への心理療法的アプローチ

畑中千紘 (こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定助教)

■研究目的

2000年代以降、「大人の発達障害」への社会的関心が高まっている。我々はこれに対し、理論的・実践的立場から多角的に研究を進めてきた。大人の事例では、発達障害の程度としては軽度であるものも多いのだが、軽度であれば問題も少ないというわけではない。自立が前提とされる大人の場合にはフォローやサポートも少なく、軽度であるがゆえに正しく理解されにくいといった問題も生じてくる。

本プロジェクトでは発達障害を本質的に理解するためにアセスメント方法の精緻化を目指している。そして、そうした見立てを生かしつつ、より有効な心理療法的アプローチのための理論的枠組みを構築することを目的としている。そしてさらには、発達障害を「問題化」してきた現代社会のあり方それ自体についても検討し、発達障害と社会とのつながりのあり方を探ろうとするものである。

■平成25年度の研究内容と

その成果

平成24年度には、大人の発達障害に対してすぐれた成果をあげた心理療法的事例の検討を重ねてきた。そのなかから、大人の発達障害の心理療法において何がポイントになりうるのか、どのような視点が重要で、それはどのような変化や展開につながるのかについてのエッセンスをつかみ、理解と対応のための総合的な理論を構築することをめざしてきた。

これらの成果は、発達障害の見立てという視点から書籍としてまとめられた (河合俊雄・田中康裕編『大人の発達障害の見立てと心理療法』創元社、2013年)。以下、本書に沿いつつ、成果の一部を具体的に報告する。

1. 発達障害への心理療法:理論的基礎

づけ

発達障害の心理療法においては、セラピストが単に受容的に話を聴いているだけではうまく展開しにくいことが多い。そのために、発達障害には環境調整や訓練的な方法を適用しようという方向が強くなっているのであるが、実際に心理療法をしていると、発達障害の人であっても心理学的に意味のある (同時に本人にとっても大きな意味をもつ) 変化が見られることが多い。

この変化を捉える上で、クライアントの「主体のあり方」に着目すること、とりわけ、隙間のない世界に間や区切りができるような「分離」の契機は重要である。たとえば、話が省略できずにずっと話し続ける人がふと沈黙したり、機械的に面接に来ていた人が自分の意志でキャンセルをしたりするようなこともそれに含まれる。これはいわばネガティブな形式を通じた主体の発現であるが、本書ではさらに、ポジティブな形式による主体の立ち上がり方として「発生」についても言及した。それは感情の噴出であったり、夢のなかの火山のイメージであったり、形はさまざまでありうるが、クライアントが心理的・身体的に発生の動きを実感することが重要である。さらに言えば、こうした動きは本人のなかの動きに限定される必要すらない。発生のイメージは自己感をもつプロセスともかかわって重要な契機といえるが、詳しくは同書の事例研究を参照いただきたい。

2. 発達障害のアセスメント

発達障害の見立てはクライアント理解においてもその後の心理療法を考える上でも重要である。同書のなかで風景構成法やロールシャッハ・テストといった心理検査の分析を行い、発達障害に共通する特徴について検討した。

ロールシャッハの分析結果からは、発達障害群の反応には、「対象に焦点づ

ける力の弱さ」が見られることが明らかとなった。これはいわば、見ようとするものに焦点が当たらないような状態を示しており、輪郭が曖昧な世界を生きていることの反映と考えられた。

さらにこうした反応の曖昧さへの対処について分析してみると興味深いバリエーションの広がりが見られた。たとえば、「見たことないのではっきりわからない」と弁明を述べる人、「ま、ま、そんな感じ!」と強引にごまかす人、「わかりますよね?」と他者からの承認を得ようとする人などその対処は多様である。確定することを求められる検査場面をどのように「しのぐ」ことができるのかという視点から見ると、被検者の直面しやすい問題が明らかになると同時に、その人がもっている力や資源も見えてくる。はじめの例では、自身のわからなさをはっきり表明することができるとも言えるが、視野が狭いとか言い訳がましいにとられる危険もある、などのようにである。

このように発達障害のアセスメントとは、単に発達障害の診断の有無を判断するためのものではない。「曖昧さへの対処」という視点から細やかにみることで、その方の素質がどのように日常で表出しやすいのかを具体的に知り、臨床的に有用な見立ての材料を得ることが重要である。

■今後の検討課題

2000年代に入って10年あまりがすぎ、発達障害をめぐる状況も徐々に変化しつつあるという実感がある。最近では、発達障害に近いところはあるが診断がつくほどではないというような、いわば「発達障害未満」と言える事例も多くなっているという話が聞かれる。平成26年度には引き続き、上記の研究を進めるとともに、近年の発達障害の動向に沿った検討を行いたい。

国民総幸福 (GNH) を支える倫理観・宗教観研究

熊谷誠慈 (こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定准教授)

■研究の背景・目的

GNH (国民総幸福) という概念は、1976年、ジクミシグ・ワンチュク第4代ブータン国王により提唱され、国策の軸に据えられた。以後、GNHはブータンの代名詞となり、各国の幸福政策のモデルの1つとなっている。世界的な注目が高まるなか、2012年には国連において「世界幸福デー (International Day of Happiness, 3月20日)」が制定された。

ブータン研究の開始は第2次世界大戦終結後のことであるが、それは歴史や人類学的研究を中心としていた。一方、1990年代に「王立ブータン研究所」(Centre for Bhutan Studies) が設立され、これまでに計5回の国際GNH学会が開催されるなど、GNH研究が一気に加速した。わが国でも、2011年に日本GNH学会が創設されるなど、GNH研究は大きく注目を集めるようになった。こうした国内外のGNH研究は、経済学者や心理学者、開発学者などを中心に進められている。

ただ、ここで忘れてはならないのはブータンが仏教国だということである。国民総幸福を含む同国の先進的政策が、あくまでその基盤を同国に深く根づいた独自の宗教的倫理観の上に置いている事実は看過されがちである。この点を無視して、ブータンの本当の理解には到達しえない。そこで本研究では、国民総幸福という広く知られた概念の根底に存在する倫理観および宗教観の仕組みについて、広くチベット・ヒマラヤ文化圏全体を視野に収めつつ、多角的に検証する。

■研究の方法・研究内容

本プロジェクトは以下の3つの柱に沿って進められた。

(1) 文献研究 (文献学に基づいてブータン仏教の思想・幸福観を解明する)

(2) フィールド研究 (現地調査によりブータン仏教の現状を解明する)

(3) 学際的研究 (後述の研究会等を通じて異分野のブータン研究者間で情報交換・共同研究を行う)

■研究会・講演・シンポジウム

1. ブータン文化講座

・第3回「ブータンを見つめた

京都大学との56年」栗田靖之 (国立民族学博物館名誉教授) 2013年4月16日
 ・第4回「ブータンの魅力とGNHの現在: 世界はGNH社会を求めるとか」草郷孝好 (関西大学社会学部教授) 2014年2月24日

2. 京都大学ブータン研究会

・第5回「ブータンの農村におけるフードセキュリティ」上田晶子 (大阪大学グローバルコーポレーションセンター准教授) 2013年4月25日
 ・第6回「ブータンのGNH政策と幸福の多層性——個人レベル・集合レベルからみる幸福への視点」福島慎太郎 (京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門非常勤研究員) 2013年7月4日

・第7回ワークショップ「ブータンのGNH (国民総幸福) 政策の詳細と現状」高橋孝郎 (国際金融公社) 2013年9月11日
 ・第8回「浄土のために踊ること: 第2次ドゥアル戦争とドチュラ祭」永澤哲 (京都文教大学准教授) 2013年12月5日

・第9回「ブータンのGNH (国民総幸福) 政策と現状」高橋孝郎 (国際金融公社) 2013年9月11日

・第10回「浄土のために踊ること: 第2次ドゥアル戦争とドチュラ祭」永澤哲 (京都文教大学准教授) 2013年12月5日

3. 国際研究会

集会名: Bhutanese Buddhism and Its Culture (ブータン仏教とその文化)

日時: 2013年7月23日 (火)

場所: モンゴル国立大学 (モンゴル・ウランバートル市内)

発表者: 本集会では、アメリカ合衆国、



お祭り最終日には大仏画が開帳され、集まった人々の前で僧侶たちにより法要や舞踊が行われる

タイ王国、ブータン王国、日本より計8名の研究者が口頭発表を行った。センター所属の3名の発表タイトルは以下のとおりである。

1. 熊谷誠慈 (京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定准教授)「ブータンにおける宗教マイノリティの研究」(A Study on a Religious Minority in Bhutan)

2. 松下賀和 (京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門非常勤研究員)「ドゥク派開祖ツァンパギャレーのマハムドラ理論の紹介」(Introduction on the Theory of Mahamudra by the Founder of Drukpa Kagyu: Tsangpa Gyare Yeshe Dorje (1161-1211))

3. 安田章紀 (京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門非常勤研究員)「ペマリンパによって発見された『小編タントラ』の研究」(A Study of rGyu bu chung discovered by Pema Lingpa)

■今後の展望

今後は、ヒマラヤ宗教研究プロジェクト、ブータン仏教研究プロジェクト、精神と科学との対話に基づくこころ観の再構築プロジェクトと連携し、より多角的な視座からGNHの概念を捉えなおす予定である。

●2014年4月1日 西田知史、望月圭、梅村高太郎が研究員に着任、森崎礼子特定助教、千石真理研究員、長谷川千紘研究員が離職。

●4月11日・12日「国際会議 Mapping the Mind (こころの再定義): 科学者・宗教者とドライ・ラマ法王との対話」(於: 京都ホテルオークラ4階・暁雲の間)。共催: 米国 Mind & Life Institute。

【4月11日】開会式; 開会挨拶1: アーサー・ザイエンス (Mind & Life Institute 代表)、開会挨拶2: 吉川左紀子。セッション1: ドライ・ラマ法王14世による基調講演、今枝由郎 (元フランス国立科学研究センター 研究ディレクター)「初期仏教におけるこころ」、トゥブテン・ジンパ (マギル大学兼任教授)「仏教心理学と瞑想実践に関する考察」、リチャード・デヴィッドソン (ウイスコンシン大学教授)「こころを変えて脳を変える: 瞑想の脳科学的研究」、モデレーター: アーサー・ザイエンス。セッション2: ジェイ・ガーフィールド (イェールNUS教授)「認識の錯覚: 仏教瑜伽行学派の観点から」、アーサー・ザイエンス (アマーフト大学名誉教授/Mind & Life Institute 代表)「量子物理学におけるこころの役割」、森重文 (京都大学数理解析研究所教授)「芸術との比較における数学: 求めるものは応用か、真理か、それとも美か?」、モデレーター: 入来篤史 (理化学研究所シニア・チームリーダー/京都大学こころの未来研究センター特任教授)。

【4月12日】セッション3: 北山忍 (ミシガン大学教授/京都大学こころの未来研究センター特任教授)「文化神経脳科学: 文化・脳・遺伝子をつなぐ」、ジョアン・ハリファックス (ウパーヤ禅センター長・創立者/老師)「プロセスベースによる慈悲の位置づけと、慈悲の修練におけるその影響」、下條信輔 (カリフォルニア工科大学教授/京都大学こころの未来研究センター特任教授)「潜在的なこころ、共感、そしてリ

アリティの共有」、モデレーター: 入来篤史。セッション4: バリー・カーズン (ヒューマンバリュー総合研究所所長)「情動の可塑性: 健全な社会の構築に向けて」、松見淳子 (関西学院大学文学研究科長・教授)「子どものこころを探り、ポジティブな学校環境を創

る: 心理学におけるエビデンスベースの実践」、長尾真 (京都大学元総長)「コンピュータはどこまで人間に近づけるか」、モデレーター: ジョアン・ハリファックス。閉会式: 閉会挨拶1: アーサー・ザイエンス、閉会挨拶2: 山極寿一 (京都大学理学研究科教授)。総司会: 熊谷誠慈、マルク=アンリ・デロッシュ (京都大学白眉センター特定助教)。

●4月24日 第20回身心変容技法研究会+こころ観研究会 (於: 稲盛財団記念館3階大会議室)。1: 藤守創 (パリ大学科学哲学研究所/科学哲学・統合医療研究)「身心変容技法としての現代日本手技療法——補完代替医療『ヴァートセラピー』における客観的指標の確立」、2: 「研究計画の確認と意見交換」、司会: 鎌田東二。

●5月15日 第21回身心変容技法研究会+こころ観研究会 (於: 稲盛財団記念館3階大会議室)。発表1: 棚次正和 (京都府立医科大学教授/宗教哲学)「心身問題と魂の永生」、発表2: 森田真生 (独立研究者/数学)「岡潔の数学と情緒」、総合討論、司会: 鎌田東二。

●5月27日 「人が育つ組織」研究会第1回 (於: 稲盛財団記念館3階大会議室)。第1部・ゲスト講演: 小田理一郎 (有限会社チェンジ・エージェント代表取締役)「学習する組織——複雑で激しい変化の時代に、人と人が響き合いながら、しなやかに、進化し続ける組



国際会議 Mapping the Mind (こころの再定義): 科学者・宗教者とドライ・ラマ法王との対話

織」、第2部・トークセッション: 小田理一郎、太刀川英輔 (NOSIGNER 株式会社 CEO/デザイナー)、内田由紀子。共催: NPO 法人ミラック、株式会社ウエダ本社。

●5月28日 京都大学東京オフィス連続講演会「東京で学ぶ 京大の知」シリーズ15 第1回「日本文化における主体性とは何か——日本人の意識、感情、関係性からの考察」(於: 京都大学東京オフィス)。講師: 内田由紀子、ディスカッサント: 吉川左紀子。

●5月29日 第22回身心変容技法研究会+こころ観研究会 (於: 稲盛財団記念館3階小会議室2)。発表1: 津城寛文 (筑波大学教授/宗教学)「心霊研究圏内のジェイムズその他」、発表2: 齋木潤 (京都大学教授/認知科学)「瞑想と脳波の時間相関構造——経過報告」、総合討論、司会: 鎌田東二。

●6月3日 第35回こころの未来セミナー「介護する家族と死別する遺族のこころを探る」(於: 稲盛財団記念館3階大会議室)。講師: Jason Danely, Ph.D, Assistant Professor, Rhode Island College (Anthropology): Visiting Researcher, Kokoro Research Center, John R. Jordan, Ph.D: Clinical Psychologist, Pawtucket, RI and Wellesley, MA, USA、司会: カール・ベッカー。

●6月3日 第23回身心変容技法研究会+こころ観研究会 (於: 稲盛財団記